

研究集会開催報告書

平成 24年 6月 29日

国立天文台長 殿

(代表者)

所属・職名 東北大学理学研究科・教授

氏 名 山田 亨



研究集会名	光学赤外線天文学連絡会シンポジウム 「望遠鏡時間の使い方: 共同利用とプロジェクト」
開催期間	平成23年9月6日～7日
開催場所	京都市左京区京都大学理学研究科セミナーハウス
参加人数	77人
研究集会の概要	光学赤外線天文学連絡会は研究集会(光赤天連シンポジウム)を年1回程度開催し、国立天文台の共同利用をはじめ、望遠鏡の整備や運用についての情報・意見交換、コミュニティの意思決定にむけた議論を積んでいる。 2011年度には、中小口径望遠鏡からすばる望遠鏡、そして将来計画まで含めて、どのような望遠鏡時間の利用が適切か議論するシンポジウムを開催した。 国内外の中小口径望遠鏡では多彩な研究が進められており、長期間を要する観測プロジェクトや突発天体に対応する観測などの例が紹介された。また今後建設が予定されている望遠鏡の装置計画や運用方針、UH88の日本時間の運用・成果についても報告され、それぞれ議論が行われた。 すばる望遠鏡は、通常の1夜単位の共同利用観測を中心としつつも、インテンシブ観測やサービス観測、他の望遠鏡との時間交換といった多様な共同利用が行われている。また、戦略枠観測も実施されるようになり、今後そちらの比重が増してくることも予想される。実際の観測成果もふくめて現状と今後の検討ポイントが報告された。議論では、現在の観測時間の枠組みや今後の方向性については概ね共通認識が得られたが、それぞれの運用については多数の意見がだされた。 今後の大型計画であるTMTとSPICAの観測時間の見通しについても報告され、運用について議論が行われた。また、これらの計画については大学からの開発等への参加の方策についても議論された。 シンポジウムの最後に、今後の大型計画の進め方、学術会議での検討状況等についての報告・議論も行われた。

(裏面あり)

研究集会の成果	このシンポジウムでは、77人の参加のもと、36件の口頭発表・報告、15件のポスター発表があり、活発な議論がおこなわれた。発表内容・議論の内容は光赤天連のウェブページにて公開されている。 現在運用されている望遠鏡の観測時間の使い方については、具体的な提案をふくめてかなり詳細な意見が出された。これらはそれぞれの観測所や運用に責任をもつ会議における検討の素材となっている。 TMT・SPICAにおける観測時間や運用の方針は現在検討が具体的に進められているところであり、シンポジウムで出された意見もそこで反映されることになる。 光学赤外線天文学においても観測手段が多様化し、望遠鏡の運用スタイルも独自性の高いものが増える中で、多くの参加者がその全体像を把握し、意見交換を行う機会を提供できたのが最大の成果である。
その他参考となる事項 (希望事項も含む)	特になし。